

## 視点3

# 「遊び」という過程へ夢中になって遊ぶ日々へ

野口隆子

(大学教員)

子どもの「遊び」その言葉からどのようなイメージを思い浮かべるでしょうか。子どもが「遊んでいる」という状態、その経験を保育者はどのように見つめ、かかわっているのでしょうか。

子どもが夢中になり没頭・集中して遊ぶ姿はどのようにして育まれるのか、ルーベン大学のラーバース教授らによって開発された、SICS (A Process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings) <sup>注1</sup> に関する研究を参照してみたいと思います。

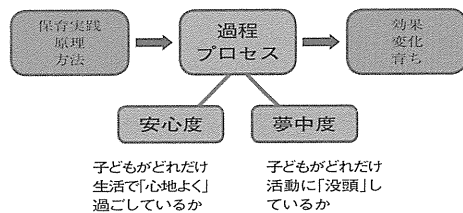
SICSは子どもの「今、ここ」をとらえ

る視点として「安心・安定 (Well-being)」と「夢中・没頭 (Involvement)」の二視点を共通軸に据え、子どもの経験がどのような質のものであるかに着目します(次ページ図参照)。

その根幹となる思想は、経験に基づく教育 (Experiential Education) にあります。保育・教育の質を結果から見るのではなく、結果に至るまでの文脈過程をより重視し、その際、子どもが情緒的に安定して心地よく過ごし、生き生きと喜びをもって過ごしているかという「安心・安定」の視点と、活動に没頭し、意欲をもって取り組んでいるかという「夢中

野口隆子 (のぐちたかこ)

十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科准教授。  
現在、幼児期・児童期の発達と保育の質の関連性や園内  
研修の方法について、共同で研究を行っています。



▲図 保育・教育における質  
 (「保育プロセスの質」研究プロジェクト  
 (2010、2011) に一部加筆)

・没頭」の視点  
 を置き、各々の  
 程度について、  
 特定の基準を基  
 に評定を行いま  
 す。子どもが夢  
 中になって活動  
 し、遊ぶ姿と、  
 生活の中で心地  
 よく過ごし、安  
 心・安定する姿

とは表裏一体であると考えられます。

「保育プロセスの質」研究プロジェクト(2010)では、日本の保育文化の中でS I C Sがどのように位置付けられ研修等で利用が可能かを検討しました。その際、評定するだけでは意味がなく、なぜその評定をつけたのか、他の保育者と理由や根拠を語り合い、相互の相違点に気付いていくことが保育を開き、学び合

う鍵となるということがわかりました。

S I C Sには幾つかのフォームシートがありますが、できなかったことなどマイナス面だけでなく、明日のより良い保育に向けて、現状で優れているところや具体的に改善したい点など保育のプラス面を見ていく手順や、環境面・子どもの主体性の発揮・保育者のかかわりや援助・クラスや集団の人間関係や雰囲気・園やクラスの運営面という五つの側面から園全体の取り組みとして検討していくという手順が設けられています。日本版S I C Sを使った研修をきっかけに、それぞれの園の子どもの姿のイメージとして「夢中・没頭」の程度が高いとはどういうことなのか、質の高い豊かな遊びとは何かを考える創意工夫、独自の深まりを示した事例が見られました(佐々木 2011)。

実際に研修で参加者に評定をしてもらうと、

同じ場面を見ても「安心・安定」や「夢中・没頭」の程度が全く違っていることがあり、驚きの声が上がります。保育経験や勤務形態、専門性などの違いにかかわらず、参加者が共通軸を基に子どもの表情や動きのとらえ、行動の解釈を語り合う場となります。子どもの今、ここ、がさらに次の、そして明日へとつながっていく、その過程を園全体で探るためのツールの一つだと言えるでしょう。<sup>注4</sup>

子どもが夢中になる姿は、周囲を巻き込む魅力と可能性を秘めています。園で出会ったある事例を紹介してみたいと思います。

六月のある日、園外散策で捕まえたザリガニを子どもたちが見ていました。非常に元気のいいザリガニばかりで、触ろうとしても素早い動きで逃げ、手を近づけるとはさみを振り上げて威嚇します。子どもたちはきゃあと声を上げながら、夢中で捕まえようとしてい

ました。逃げられても挟まれても、あきらめずにザリガニに向かい、「見て！」とザリガニをつかんで一緒にポーズをとっています。

そうした周囲を見つつ、一人の女児が「怖い、怖い」と言い続けながら何とかつかもうとします。周りの子どもから「こうやるんだよ」と言われ、先生もその女児の傍にいて声を掛けつつ、しかし先生自身、動きの素早いザリガニを捕まえるのに苦心し、挟まれるたび「痛い！ 痛い！」と言いながら、笑顔で子どもたちとかわっていました。女児は「怖い」と近づいたり離れたりして、ザリガニ、先生、周囲の子どもを見つめます。はさみで挟まれて痛かったせいか途中であきらめ、ケースを斜めにして、浮いている餌をザリガニにつかませようしていました。

だんだんと周囲の子どもたちがいなくなり始めた頃、意を決したような表情になり、先生がつかんでいる様子をよく見て、ついにザリガニをつかみ、「先生、早く！」と声を上げ、「すごいね！」という保育者の応答に、すぐにザリガニを離しました。

子どもたちは夢中で生き生きとした表情を見せて、全身で楽しんでいました。横で見守っていた園長先生は、今、ここ、では言葉を掛けなかつたけれど、ザリガニは本当に面白い形をしているので、そこにもいつか気付いてほしい、という思いも持っていたそうです。

日々の保育の中のさまざまな場面において、子どもたち一人ひとりに探究や挑戦の機会があります。しかし、その子どもの経験をとらえ次を考える視点は複層的であると思われ<sup>注5</sup>ます。子どもにとって意味ある経験が園生活の中でどのように創り出されていくか、あらためて考えていく必要があるのではないか、私も研究していきたいと思えます。

#### 引用・参考文献

- 1 Laevers, F. (2003) Making care and education more effective through well-being and involvement. Laevers, F. & Heylen (eds.) *Involvement of Children and Teacher Style.*

Insights from an International Study on

Experiential Education, pp. 13-24. Lueven

University Press.

- 2 「保育プロセスの質」研究プロジェクト『子どもの経験から振り返る保育プロセス—明日のより良い保育のために—』幼児教育映像制作委員会事務局 二〇一〇年

- 3 「保育プロセスの質」研究プロジェクト『子どもの経験から振り返る保育プロセス—明日のより良い保育のために—実践事例集』

H22年度児童関連サービスク調査研究等事業報告書成果物 財団法人こども未来財団 二〇一一年

- 4 野口隆子『『子どもの経験を捉える視点』を養うために』発達126 Vol.32 pp. 18-24

ミネルヴァ書房 二〇一一年

- 5 野口隆子「幼児期の挑戦的意欲を育む」日本教材文化研究財団研究紀要 No.44 pp. 83-87  
公益財団法人日本教材文化研究財団  
二〇一五年